

北東北と高坂家・香坂家の繋がり

1. 大川原の火流し

「東北アワー10 高橋克彦の歴史紀行 火流し幻想 ～八甲田・600年の落人伝説～」がNHKTVで放映された(1986.12.28)。大川原の火流しは、例年8月16日(後醍醐天皇の命日)に執り行われ約600年続いている。カヤとワラを編んで長さ3m・幅1.5m・高さ5mの舟を3隻つくり、これをワセ・ナカ・オクテと稲作の3種になぞらえる。カヤの帆柱に火をつけ、3隻のワラ舟を舟子と呼ばれる人達が中野川の下流まで流していくものである。青森県黒石市^{おおかわら}大川原(八甲田山^{おおかわら}付近)に香坂高宗の一族が、伊那大河原より落ち延びたという「南朝の落人伝説」がある。大河原と大川原は約600km離れているが同じ地名である。600年前というと、南朝が敗北した頃である。大川原の旧家の古文書には信濃大河原、香坂高宗、宗良親王の名がみられるという。南朝の落人が辿り着いた可能性が高い。

日本は古来より、亡くなった人の魂に気を使い、治まらない鬼・成仏しない魂を恐れて鎮める行事が繰り返され供養をしてきた。浮かばれない魂・鬼は灯りや刃物を恐れたので、火をもって追い払い清めてきた。大川原の火流しは、迫害され悲しい歴史を持つ香坂一族の怨念を晴らしているのかもしれない。

何故、信濃の大河原から約600kmも離れた青森の大川原へ落ち延びたのであろうか。それは次の理由により裏付けされるのではないだろうか。

- 当時、青森一帯は南朝方の^{なんぶ}南部氏・北畠氏が治めており北の要であった。
- 鎌倉時代より北条氏は諏訪大明神を氏神として、信濃と東北地方を一体化した。その為、東北地方に諏訪神社が各所に造られ、多くの御家人が送り込まれた。
- 東北に強い影響力を持っていた南朝方の諏訪一族と香坂高宗の一族は、親戚関係にあった。そもそも、高宗に宗良親王を^{かくま}匿う様に勧めたのは諏訪一族であった。

2. 高坂蔵人^{くらんど}

生年・生国・諱は不詳、慶長17年(1612)没。弘前藩の武将。初代藩主津軽為信、二代信牧に仕える。その名は、「津軽藩旧記伝類」や「津軽一統志」に記されて

いる。信牧と対立し、津軽藩空前の集団脱藩事件(高坂の乱)に深く関与した。
信濃高坂家の一族の者かは不明であるが、武田家が滅亡した天正 10 年(1582)ごろのことなので、その可能性はあると思える。

3. 田代町誌

秋田県大館市田代町「田代町誌」の文中、早口本郷地区^{はやぐち}に、高坂彦右衛門(高坂定雄・篤)、朝之助(高坂健一)が、坂地地区に、高坂与四郎が、山田地区に、幸坂作左衛門が、柏木地区に、幸坂吉蔵、幸坂吉郎右ヱ門、幸坂弥蔵・高坂弥蔵がみえる。幸坂は、高坂・香坂の名を変えたのかもしれないが、詳細は不明である。

4. 高坂文書

青森県立図書館や大館郷土博物館に高坂文書が収蔵されている。県立図書館には、「持抱高反別帳^{じほう たんべつ}」や「永代売渡申畑方之事」が収蔵されている。

信濃の高坂家・香坂家との関係は不明だが、大館、弘前、黒石、浪岡は同じ圏内にある。大館から浪岡まで約 68km。南部氏・北畠氏は南朝方と深いつながりがあった。南朝方の敗北・武田家の滅亡を機に、北東北へ逃れた落人の可能性はあると思われる。

(川端紅葉著 2026・3・27)